

研修会報告：「トランプ化する共和党の歴史的背景」 12月12日(水)

講演：中山俊宏氏

(慶応義塾大学総合政策学部・教授 日本国際問題研究所・客員研究員)

研修担当理事：久野哲郎



昨年12月12日(水)、経団連米国事務所において、中山俊宏氏をお招きし、「トランプ化する共和党の歴史的背景」を題名とする研修会を開催しました。講師の中山俊宏氏は、アメリカ政治・外交、日米関係、国際政治がご専門で、国連代表部やブルッキングス研究所での調査・研究での米国生活に加え、現在は慶応義塾大学からの派遣留学でウィルソンセンターにてご研究中で、ワシントン

DCにご滞在中です。

11月6日(火)の中間選挙結果を踏まえ、「トランプ化」が進行する共和党について、その歴史的背景や今後の米国の政治・外交に与える影響についてご講演頂きました。

まず、共和党支持者の9割がトランプ大統領を支持する一方、反トランプを標榜する有力議員が相次ぎ引退するなど、共和党が「トランプ党」化している現状を説明されました。そうした中、トランプ大統領に距離をおく「保守派」論客が増えてきている、とのこと。そしてこれは、トランプ大統領は「保守」なのか、「反動」なのか、という問いかけにつながる問題と指摘されました。そしてこれは、トランプ党化する共和党にも向けられた問いかけです。

そもそもアメリカにおける「保守」主義とは何か？を中山先生は論じられます。欧州や日本と異なり、守るべき過去がないアメリカ、革命を正当化するアメリカで「保守」とは何か？ 大不況後のニューディール政策以降のアメリカ政治思潮の本流であったリベラリズムに対し、1950年代に誕生したのが①小さな政府 ②反共主義 ③伝統的価値観の3要素を融合させた「保守主義」。その後、急進化・過激化し、1964年の大統領

領選挙ではゴールドウォーター共和党候補が惨敗。その反省に立って、バックリー氏などが中心となり、人種差別主義や反ユダヤ主義、反知性主義、急進反共主義など過激主義を保守主義から除外し、言説面でも「管理」を行った結果、「太陽のように明るい保守主義」を体現するレーガン大統領が1980年に当選。この結果、保守主義に対する不信が取り除かれ、「きつとうまくいく」楽観主義は広く支持を得て、保守主義は正統なものと見なされるようになった、という歴史的経緯が説明されました。

1996年には民主党のクリントン大統領ですら、演説で「大きな政府」の過ちを認めるほどにまで「正統化」した保守主義も、2000年代に入り、ブッシュ政権が天下を制した頃から自壊の道を歩み始め、サラ・ペイリン副大統領候補やディーパーティの出現など「反動思想」への回帰現象が顕在化。バックリー氏が行ってきた、過激主義の封じ込め、言説からの排除などの「管理」ができなくなり、さらにそうした「管理」自身が批判されるようになってきたのが2015年とのこと。

こうした中で、誕生したのがトランプ大統領であり、今まさにトランプ党化しつつある共和党といった現状を踏まえると、こうした共和党の将来は？も考えないといけない、との指摘がありました。日本として米国とどう向き合っていくか、という問題とは別に、こうした保守主義の変遷経緯を見た上で、やはりトランプ大統領に対して違和感を持ち続けることは必要、というご指摘は印象的でした。

一方、日本として米国とどう向き合っていくか、ということについては、日本にはプランBはなく、あったとしてもプランAダッシュ。どこまで懐に飛び込んでいくか、飛び込んでダメだった場合どうするか、を考える必要があるが、とにかく「共和党なら安心」という時代は終わった、と認識する要あり、とのこと。

「しょうがない」からアメリカ、ではなく、なぜアメリカを「選択」しているのか、ということ言語化する必要がある、というご指摘には、まさにその通り、と強く首肯させられるものがある、とても迫りに満ちた講演会でした。

写真からもご想像頂けるように、会場を埋めた46名もの聴衆の皆様が非常に熱心に聴講され、さらにその後の質疑も深い内容が込められたものになり、有意義な研修会であったと感じています。

今回の研修に際し、会場をご提供頂いた経団連米国事務所様に、この場を借りて御礼申し上げます。

